季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻25号

春号

2007

3,4,5月

「古城（ふるしろ）」築城四〇〇年

越後福島城を行く

巻頭エッセイ◉このまちのこと

直江津の浜風

◉この人に学べ◉

電灯100年上越地域電力開発の父

國友末蔵

配流800年　親鸞の風景

ゐなかの人々と親鸞3

【文学の旅】

蓑笠（さりゅう）の人。

柿崎区◎角取（つのどり）

季刊 直江の津 第25号 春号
2007—3・4・5

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
直江津の浜風　江塚友之　3

■配流800年 親鸞の風景
連載5　ゐなかの人々と親鸞3　松野純孝　4

■「古城（ふるしろ）」築城400年
越後福島城を行く　6

■文学の旅
蓑笠の人　水上 勉　16

■この人に学べ　國友末蔵　18

■カメラの眼　27

■読書びと
知恵の悲しみの時代　長田 弘著　26

■建物さんぽ　24

■アルバムの一枚　30

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。


屋根の上を行く船

♣巻頭エッセイ
江塚友之さんのこと

1972年長野市生まれ、上越市育ち。九州芸術工科大学芸術工学部（現九州大学芸術工学部）卒。
モノづくりやまちづくりをするには自分の住む土地への愛着（愛情）が必要と感じ、上越市で生きていくことを選択。市内の設計事務所勤務を経て、2006年江塚デザイン設立。現在、住宅設計を中心に活動中。

直江津の浜風

江塚友之

今年の冬は記録的な暖冬で、冬らしい日がほとんどなく、地球温暖化もここまで進行したかと思えるほどだった。さらに、二月半ばにして花粉症を発症したのも記録的だった。

すっかり季節の感覚も狂い、このまま春が来てしまうのかと思っていた矢先、大荒れの天候となった。窓の外では、雪が真横に降っている。地球温暖化と花粉症の心配は少し和らいだが、あまりの風の強さに家が心配である。

私の家は国分寺近くの小高い場所に建っている。敷地の西側は斜面になっているのだが、背丈程の樹が数本立っているだけで、海から吹く北西の風が容赦なく屋根や外壁を叩き付ける。

三年前にこの地に家を建てた。直江津の浜風を知らない私は、〈環境と景観〉にだけ配慮して、外壁は杉の下見板張り、塗装は自ら柿渋と天然オイルで仕上げた。手間と暇を大いに費やしたその外壁の北面と西面は、吹きつける浜風のおかげで、たったの一年でみごとに鼠色に変色した。あれだけの労力を費やした塗装が一年で剥がれてしまったのはとても残念だが、強がり(?)に聞こえるかもしれないが、「これで周囲の景観に馴染んだのだ」とも思う。

浜風に叩かれて鼠色になった下見板の外壁が連なる直江津の海岸っぱたの景観は、この町らしくて、私は好きなのである。

二年程前、国分寺の境内でのこと、木工をやっている知人から「海の近くの木は浜風にたたかれて枝が縮れる」ということを教わった。境内に立つケヤキの枝を見たが、その時はその意味が分からなかった。ちょうど、庭に興味を持ち始めた時期で、どこへ行っても木を見るのが習慣になっていた。そうやっていろんな木を眺めているうち、「なるほど」と思うようになった。高田のケヤキは背も高く、箒型の典型的なケヤキの形をしている。一方、直江津のケヤキは枝振りがコンパクトである。枝も確かに縮れている。

両手を広げたようなケヤキは姿が美しく、庭にはそんな樹を植えたいと思う。しかし、ずんぐりとした、盆栽をでっかくしたようなケヤキの姿も、直江津の浜風を知れば逞しく美しくも見える。

外は相変わらず強風が吹いている。これくらい荒れた方が直江津らしくていいし、このような風土から、この土地の景観や風景が生まれるのだと、改めて思う。

配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載5

名なかの人々と親鸞 3

―― 僉議の精神 ――

松野純孝

親鸞の門弟交名というものがある。普通、『交名牒』と言われている。現存のものは皆古写本で、原本は親鸞没後五九年から八二年迄の間に成立したという。ここには親鸞の門弟の名と住所、各念仏集団のリーダーやその流れが記されている。

親鸞の晩年、念仏の広がりが遂にところせき念仏弾圧となっていった。各地に形成された念仏集団の中でも、下野の高田を拠点とする高田門徒、下総の横曽根門徒、常陸の鹿島門徒、奥州の大網門徒などが有力であった。

このような門徒集団に「制禁」とか「定」と称したものが二、三見受けられる。そのなかで、「衆徒之僉議を経て」、「門徒の僉議をへて」、「惣門徒の僉議あ(っ)て」など、「僉議」という言葉が繰り返し出てくるのである。たとえば、師匠であるからといって、是非をたださず、弟子を勘当すべからず。師匠であるからといって独断専行は許されぬと、師匠への注文である。また、私に弟子同行を勘当すべからず。科があった場合には、門徒の僉議を経て、その趣きに従って罪科現在たらば勘当すべし。然りと雖も、先非を懺悔せば、ゆるしつべくばゆるすべし、と。或は同行のなかに妄語を致し訴え申すというとも、両方の是非をきいて理非をひらくべき事、等とある。

「総門徒の僉議」とか「衆徒の僉議」といった言葉、また「同朋同行」とか「同行」という言葉がよく見える。「僉」とは皆悉くという意味である。一人残らず全員で納得し決めるということで、同朋同行とは、門徒たちが上下の差別なく、しんから睦みあうことである。こうしてみると、念仏の門徒集団はお互いに同朋同行といって心からむつみあい、何事も独断専行を排し、ひとりも残さずすべてのひとたちの話合い、納得のうえでものごとをきめるというのであり、一人でも納得のいかない者があれば、決めにならないというのである。

民俗学者の宮本常一さんは、対馬での村の寄りあいについてこう語られている。発言は互角。夜もなく昼もない。古老の話では昔は家から誰かが弁当を持ってきた。夜になって話しがきれないと、その場へ寝るなり、起きて話して夜を明かす者もあり、結論が出るまでそれが続



いたといっても三日で大抵のむずかしい話ももう誰も異存はなかろうということでかたづいた。このような寄りあいは古い記録でも二百年近い前にもあったという。恐らくずっと昔からの伝統ではなかったか。仏教のサンガ（衆・和合衆と漢訳。修行者の集り）では、議事はすべて一人の反対もなく全員一致で決せられることが原則。中立は反対ではないとされた。

親鸞の門弟で新堤（にいづつみ）の信楽は親鸞と法文の事でどうしても納得できずに本国に帰ってしまった。法文の事で親鸞ともあろう人がどうして説得できなかったのか。

信楽は『交名』に門弟として載っているのでやがて納得できてまた復帰したわけである。また『歎異抄』第二条に、遙々東国から親鸞の所へ上洛の門弟たちの執拗な問いに、とうとう親鸞は、つまるところ私の信心においてはこうなのだ。この上は念仏を採用しようとも、また捨てようとも、あなた方めいめいのお考え次第であると言っている。以上、納得いかなければ承服できないおなかの人々の面目がうかがえる。

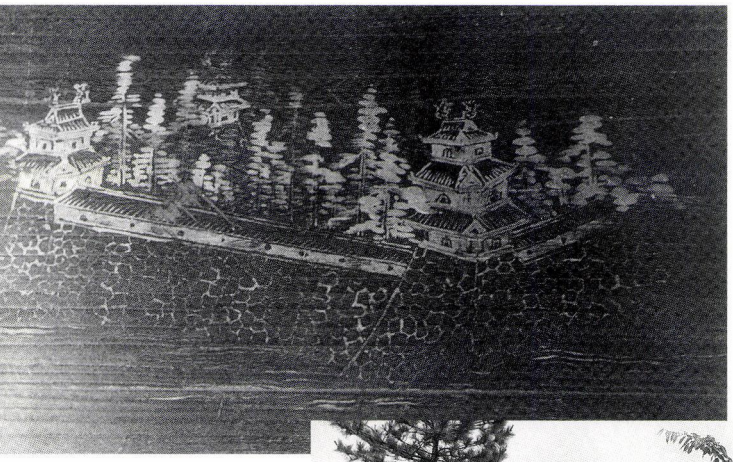
つぎに「同朋同行」についてみよう。親鸞晩年真筆の書簡に、ゑん仏房という門弟が主人の許可なくして高田（？）から親鸞の許へ上洛した。そこで親鸞はその門徒のリーダー・真仏にゑん仏の主人にそのとりなしを依頼しているのである。主人の許可なくして上洛する（ゑん仏は後述の如く下人（げにん）である）下人の門弟もいたのである。また『三河念仏相承日記』に全門徒の代表格の真仏・後を嗣いだ顕智・専信と下人弥太郎の主従四人が高田から上洛して親鸞に念仏の不審についてたずねる話がある。一行四人は建長八年㪚（一二五六、親鸞八四歳）十月、途中、矢作（やはぎ）（三河）の薬師寺で念仏の伝道をはじめる。一行四人の中に下人の弥太郎がいた。帰途一行四人は親鸞から自筆の名号本尊を頂く（梅原真隆・平松令三説）。下人弥太郎は出家して随念とある。下人弥太郎は全門弟の代表格の門弟と同等に親鸞から名号本尊を頂戴しているのである。

恵信尼文書は板倉区あたりに居住していた恵信が京都にいる末娘の覚信尼に建長八年、おくった下人譲状から始まる。大小の男女合わせて八人の下人で、その後の動静が伝えられている。この下人は鎌倉幕府法の「奴婢（ぬひ）」であろう。奴婢の間に子供が生れた場合、男子であれば父に、女子であれば母に付く、という幕府法に則っている一文があるからである。その奴婢たちのなかに三郎たという男の奴は入道になって、「さいしん」と申すとあり、また、とう四郎という男の奴は、恵信がまたそちら（覚信尼）に上洛参上させたいと申したところ、「父、母うち捨てては参るまい、と心に誓いました」と言うのである。前記のゑん仏房と弥太郎は下人といっても主人に仕え使われている身分なのに対し、恵信の下人は奴婢で同一でないと思える。古代の僧尼令（そうにりょう）によると、奴婢はその身分のままでは出家できず、主が賤を免じて出家させ、主自ら願って出家させたとある。而して主以外のものとの関係では、「物」でなく、「人」としての性格を持つと（戸令）。そういう奴婢の身分でかような発言を恵信にしている。恵信と奴婢との雰囲気がほほえましい。

ともかく門徒のなかに下人がおり、出家しているのであり、また奴婢の身分で出家したり、主の命令に、ノーと自由な発言をしていることが注目される。

門徒の制禁・定の僉議の精神は、サンガのそれと同じであり、そしてサンガのそれは、おなかの人々の寄りあいが原（もと）にあったのではないか。

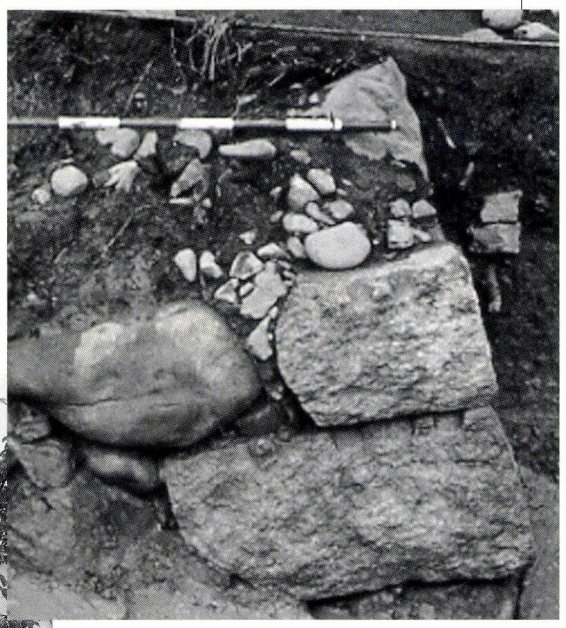
「古城（ふるしろ）」築城400年
越後福島城を行く



上　福島城と伝えられている絵図。江戸時代後半に描かれたと思われる。三重櫓が石垣の上に見える。（頸城歴史漫歩・中澤肇著より）



右　古城小学校の校庭に野面積みの石垣が再現され、福島城址の碑が建っている。



本丸大手門の石垣。花崗岩の切石と自然石の組み合わせを見ることができる。

城の大きさ

■本丸

一辺が約二〇〇メートルのほぼ正方形で、石垣がめぐり、幅五〇～七〇メートルの堀に囲まれている。西の大手と東の搦手は枡形門で、門の礎石には花崗岩の切石が積まれていた。

いわゆる天守閣は無く、北西の隅櫓が三重の櫓で、「天守櫓」と呼ばれていたという伝承があり、廃城に伴って高田城の三重櫓に転用されたという説もある。

明治のいつごろか、曲馬団から逃げ出した娘が石垣の間に何日も隠れて、とうとう逃げおおせたという話が残っている。

古城小学校は本丸の中にある。

■二の丸

本丸を中心に、幅三〇～四〇メートルの堀と土塁で囲まれた、東西八〇〇メートル、南北六〇〇メートルの大きさで、本丸の西側には、小町川を通し水運の便を図っている。

二の丸には、堀監物直政の屋敷など家老の屋敷や城の重要な敷設が配置されていた。

現在の保倉川は、大潟・中谷内の新田開発のための排水と舟運を兼ねて、松平光長の時代に、この二の丸の堀を利用して開削したものである。

■三の丸

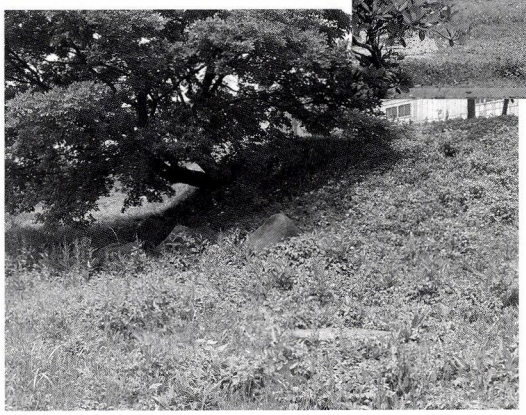
南北一三〇〇メートル、東西一八〇〇メートルという大きさで、北は日本海に、西は関川に面して現在の直江津橋を越えるあたりまで土塁を廻らし、南側は約一〇メートル幅の



㈱住友金属直江津の南門内に本丸東南隅櫓の土塁が保存されている。目の前の守衛所に声をかけて見学できる。



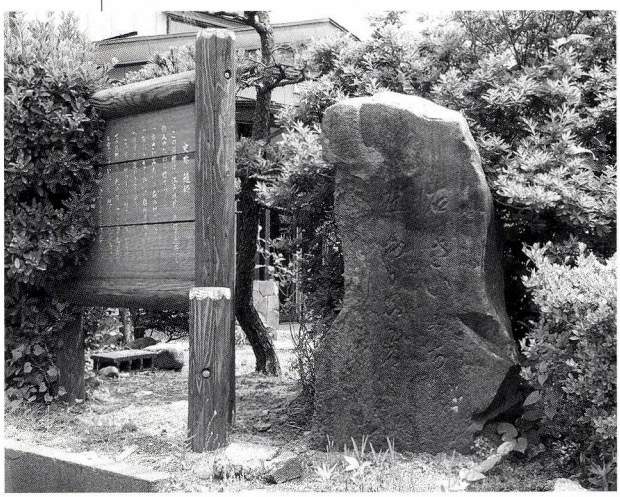
昭和四二年、当時の日本ステンレス工場の増築に伴って櫓の発掘が行われ、工場の好意で変更されてこの部分が保存された。



三の丸総曲輪土城口近くにある鹿島稲荷・鹿島地蔵。奥州街道が土塁に沿って折れるあたり。春日新田2のスポーツ公園内。



佐内橋南橋詰にある道標。「右さいみち　左おう志う道」と刻まれている。石は福島城の石垣を転用したもの。



土塁と堀で東へ進み、小町川を渡った所から北に折れ、スポーツ公園の北側を上越テクノセンターの北西隅まで延々と続いていた。

東の守りは、国道八号線の保倉川大橋、JR黒井駅、漁港入り口を結ぶ線を流れる保倉川を堀として防御線にしている。

本丸、二の丸を含めると約二一〇ヘクタールもの大きさになる。

■城下町

三の丸の南側に町人町、寺町が広がり、現在、高田に見られる古い町名や寺町の寺院の多くがそのままあった。

■表門への出入り

城の表門への道は、荒川橋の少し上流の住吉神社付近から架けられた往下橋を渡り、枡形門を通って三の丸から、二の丸、本丸へと進む。

関川の拡幅前まで存在した川原町には、枡形の名残か、道がクランク状になった部分があった。

■奥州街道

労災病院のあたりから関川を渡っていたと推定される奥州街道を三の丸入り口の往下橋を渡らせるようにした。道は三の丸の土塁に沿って歩き、保倉川大橋の上流にあった府門橋を渡って、黒井神社のあたりを目指して直線に進み奥州を目指す。

■参考資料　上越市史叢書8考古／甦る越後福嶋城・渡邊昭二
越後福島城史話・中澤肇

■写　真　発掘関係の写真は上越市教育委員会



福島城の発掘が始まる直前の昭和41年ころの撮影と思われる。南堀の跡がはっきりと見て取れ、東南隅櫓など本丸の雰囲気がわずかに残っているのが分かる。
このころ直江津港には待望の1万トン級の大型船舶が接岸できるようになり、周辺が大きく変貌しようとしているころである。



発掘の杭打ちが行われたステンレス工場の社宅付近。右の航空写真でも分かるように、多くの社宅が並んでいた。

堀氏のこと

豊臣秀吉の命で越後に封ぜられた堀秀治は、このとき弱冠二三歳であった。秀治の父秀政は秀吉の信頼があつく、秀吉は、奥州まで平定したら秀政に奥州を任せようと考えていたという。

秀政は、わずか二九歳で長浜城主となり、佐和山城主から越前北ノ庄城主になったが、天正十八年（一五九〇）、小田原攻めの陣中で急病のために三八歳で帰らぬ人となった。

慶長三年（一五九八）北ノ庄から春日山城主になった秀治は、春日山城を廃して福島城の築城のさなか三一歳で没し、忠俊が十一歳で福島城主となった。

この堀氏三代を支えたのが、「監物堀」にその名を残す堀監物直政である。直政は奥田姓であったが、秀吉に仕えるようになって「堀」姓を与えられている。直政は秀政とは従兄弟でありながら、家臣として秀政をよく支えている。それには二人の間にある約束があった。戦国の世では、小身から大身になるには、心きいた家来がいなければならない。先に功をあげたものが主となり、一方は家来となって共に堀家を興そうというのである。

秀政の死後、若い秀治をよく補佐し、関が原の合戦では徳川方に属して家の安泰を計っている。秀治が亡くなると、幼君忠俊を二代将軍秀忠の前で元服させ、将軍の名前の一字をもらい、松平越後守忠俊と名乗らせている。これらも直政が堀家安泰のために計ったものだと言われている。

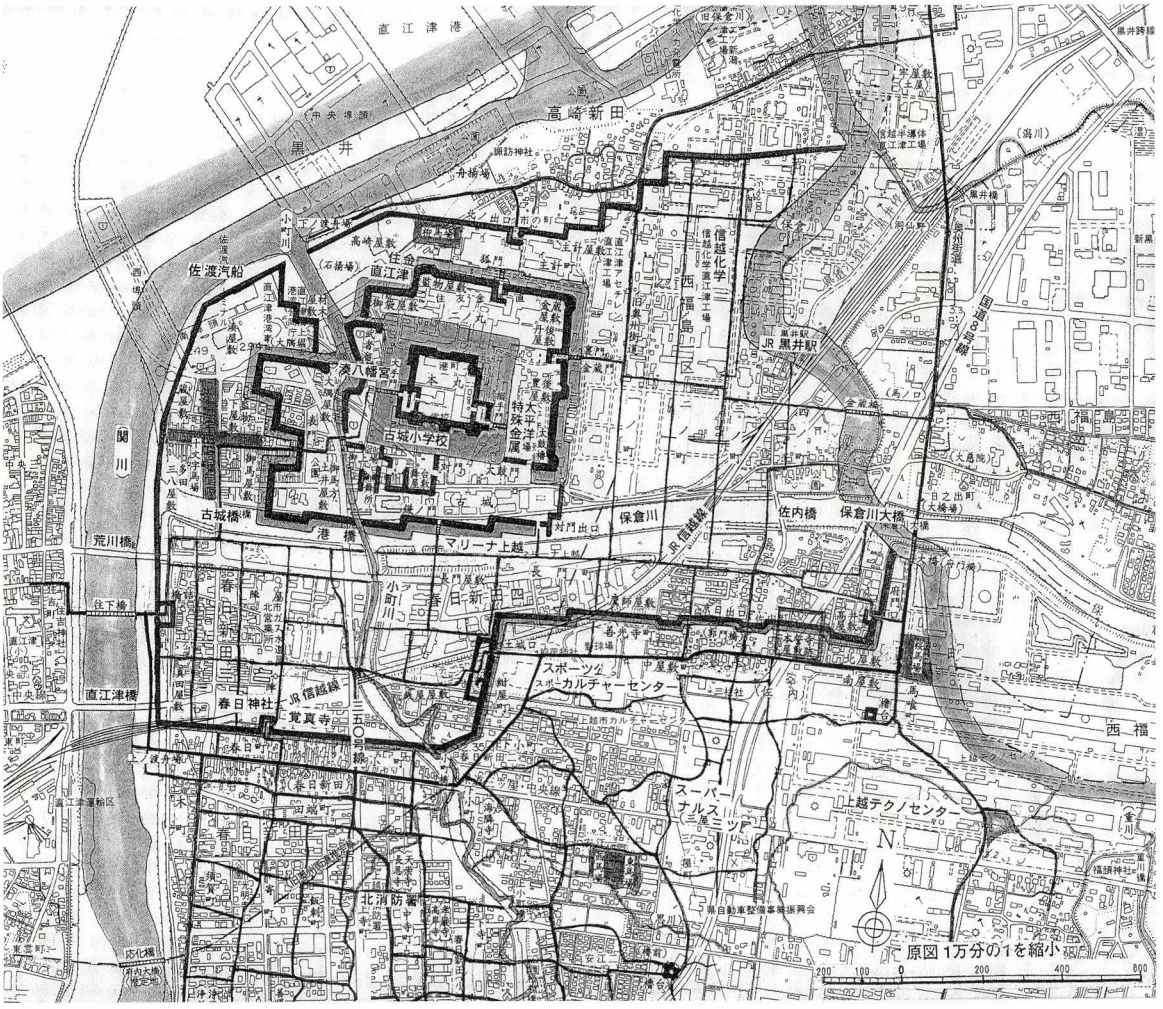
直政は、慶長十三年（一六〇八）、六二歳で亡くなる。遺骸は甲冑を着け、遺民一揆に悩まされた上杉氏のいる米沢を睨むようにして、林泉寺に葬られたという逸話があるが、京都の高台寺に葬られ、高野山に改葬されている。

直政亡き後、子で異母兄弟の直清と直竒（なおより）が堀家の家政を司ったが、両者が対立して内紛が起こり、主家の忠俊は改易され磐城鳥井氏に、直清は出羽最上氏にそれぞれ預けられ、直竒のみ大阪の陣の功績などが考慮され、信濃飯山四万石へ転封となり独立の大名となった。直竒の系統が後に村上十万石や村松藩を興すことになる。

直政の堀家の流れは、明治に至ってもとの奥田姓に復した。

地籍図から福島城を掘り起こす

渡邉昭二



佐内に生まれ育った私は、福島城の土塁からスキーで滑ったり、総曲輪の土塁を削って、堀跡や付近の田んぼへ運んで客土したことをよく覚えており、そのころはまだ、かすかに城跡の面影が残っていました。

また、区画整理や町名変更がなされていない昭和三十年以前は、大字・小字界のほとんどが福島城の堀、土塁、道、河川、水路を境界とし、字名も城の施設、町、寺院の名前が付いているものが多くありました。

役場に勤めるようになり、たまたま地籍図（更正図）に関わる仕事に就いたことから、地籍図から福島城の姿を読み取ることが出来ないかと考えるようになりました。後年、本格的に取り組み、「直江津町史」や「訂正越後頸城郡誌稿」などの「福島城図」を参照しながら、工場進出や宅地造成で城跡が破壊される前の、明治二十年代に製作された地図（更正図）に書き込んでみました。

上の図は、それを現在の地図に合わせたものです。この図を見ると、城の名残を留めるのは、南東隅櫓跡など僅かになってしまいました。

■筆者
昭和二年、旧有田村大字佐内（現・上越市佐内町）に生れる。有田村役場・直江津市・上越市役所に勤務する。
著書に「甦る 越後福嶋城」がある。

上の図は、上越市役所発行の1万分の1「上越市街図」の一部を使用している。
太いゴシックで表された地名および道路や施設の名称は編集部で加えた。



ボール紙は赤く変色しているが、展示用にリングでつながれたまま保存されている。遺物の実測図の台紙も手作り。

福島築城とその背景をめぐって

小島幸雄

昭和三九年（一九六四）、日本中が東京オリンピックに沸いた頃、直江津市では遺跡の保護に画期的な事件が繰り広げられていた。「御館跡」の発掘調査がそれである。遺跡など一部の好事家のものであった時代、区画整理事業に先立って発掘調査を実施し、その一部を公園として保存する快挙を成し遂げたのである。保存区は「御館公園」と名付けられた。遺跡が残されたおかげで、我が家の前にある御館公園には、『炎の蜃気楼』の女性読者が、「御館の乱」の悲劇の武将上杉景虎公を偲ぶために多く訪れている。

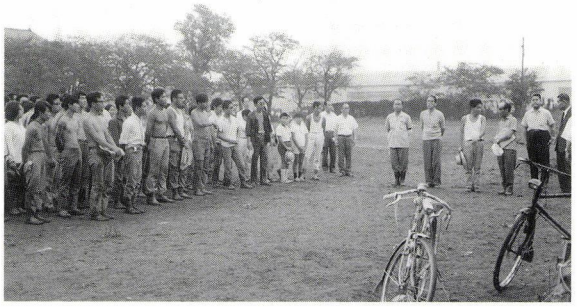
この事件が画期的だったのは、「御館」の名を残したにとどまらず、昭和四一年から四年間に及ぶ福島城跡の発掘調査、保存運動へと進化を遂げたことであった。

福島城跡の発掘調査に際してさまざまな活動を行った記録が残っているので、それを手がかりに当時どんな人たちがどのようにかかわったか探ってみよう。

右の写真は発掘の様子を展示したボール紙のパネルである。調査に参加した高校生に遺跡の意味やその歴史を記したレジュメも作られていた。なんとガリ版刷り。コピー機が普及し、死語となったガリ版であり、印刷システムである謄写版そのものを知らない人が多いのではないだろうか。ヤスリ板の上でカリカリ音をたてて原稿を書き、手を真っ黒にしてレジュメを刷る。苦労が目に浮かぶ。どのような方が担当したのだろうか。

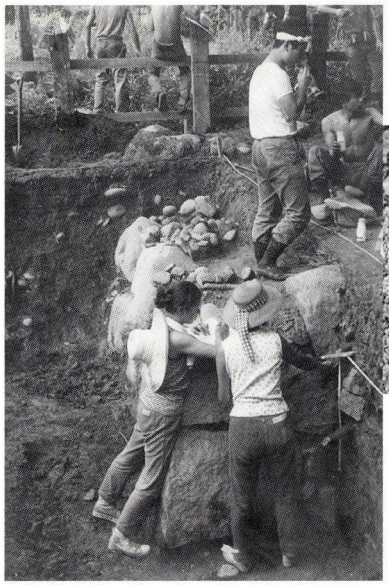
右下の二枚の写真は、発掘調査の朝礼の様子であろうか。奥田直栄先生、中村辛一先生、古川渉先生、佐藤策次市長など（いずれも故人）懐かしいお顔が並ぶ。話を聞く集団は、発掘調査の主力となった学習院大学の学生さんとそれを補助した上越地区の高校生であろう。

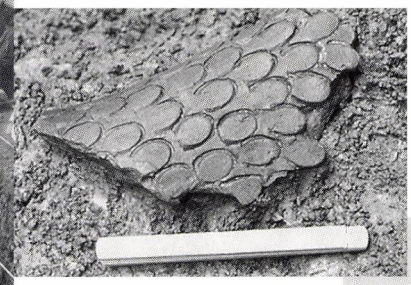
奥田先生は福島城主堀家の分家で、柏崎の椎谷一万石の領主であった堀氏の子孫である。奥田姓であるのは、豊臣秀吉から賜って改姓していた「堀」姓を廃藩置県の際「奥田」の旧姓に戻したのだと聞いた。「堀氏の子孫は奥





二の丸の南堀を背にして、古城小学校校庭での朝礼。よく見ると小学生らしき姿も見える。





上は発掘された鴟尾、右は、堀氏の家紋である梅鉢紋が施された軒平瓦。左は大手門の発掘。





搦手門の発掘。巨大な枡形を持つ大規模な門であったことが分かった。

田姓が正しく、今の時代に堀を名乗っているのは正統の堀一族ではないんだよ」と話された奥田先生の温和なお顔を思い出す。

今でこそ、中世や近世の遺跡を考古学の対象として調査・研究が全国で繰り広げられているが、御館や福島城の調査が行われた昭和三〇～四〇年代では非常に珍しい調査であった。直江津という町が、御館や福島城に寄せる想いがいかなるものであったか推し量れる。また、多くの人たちがいろんな形でかかわり、市民運動ともいえる活動があればこそ、調査も成功し、遺跡の一部であっても保存するという成果に到達したのであろう。今、われわれが行っている調査でも現地説明会や報告会を行うが、市民とどれほどのかかわりがあるかというと、はなはだ心許ない感が否めない。三〇数年前の発掘調査記録を読み返しながら、学ぶべきことが多いと再認識している。

築城の背景

福島城は、慶長十二年（一六〇七）の築城であることに異論を挟む余地はないが、築城の開始はそれをさかのぼること七年前の慶長五年であることが中沢肇先生によって指摘されて久しい。自然石積みの石垣を有する平城であれば、五年間の築城期間は優に必要であったのであろう。石垣の材料は矢代川と名立川のものであると聞いている。

さて、慶長三年（一五九八）に春日山城主となった堀氏が、二年後になぜ福島城築城に着手したのかを考えてみたい。春日山城の成立はともかく、謙信公・景勝公の時代には少なくとも春日山城は、越後統一のシンボルであったわけで、豊臣秀吉の命を受け越後太守として入封した堀氏にとっても越後支配のシンボルであることにかわりはない。にもかかわらず、春日山城を廃した意味はどこに求めればよいのだろうか。

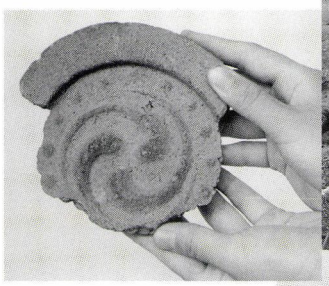
これまでもこの問題については①山城停止令が出されて平城を造らなければならなくなった、②徳川幕府の意向に沿って堅固な春日山城（山城）を捨てて平城を造った、などの考えが出されていた。また上杉氏の越後支配のシンボルである春日山城を捨てて新城（福島城）を築き、支配権の確立を試みた、という考えもあった。

しかし、山城→平城という構図で考えればそのような理由でも評価は可能であろうが、関川の河口という土地を選択した理由は説明されていない。くどいようだが、山城→平城ということであれば、春日山城と府中に近い三交周辺も自然堤防が発達し、水害の心配もなく好地であったろうし、上杉色を払拭するために町を替えるのであれば、高田周辺にも沢山の土地があったはずである。では、何故関川河口でなければならなかったのであろうか。その答えは「津」に求められないものであろうか。

津を、港の持つ機能のうち流通拠点としての船の発着場所であるとすれば、直江の津は、府中に入る荷を揚げたり、搬出する荷を出したりした場所ということになる。関川は、現在の流れを見てもわかるように大型船が出入りできるような深さや流れではなく、比較的小型の船が航行できる程度と考えてよい。そ



炎天下で発掘作業が続く。



巴紋の軒丸瓦と独特の鮮やかな色合いを残す織部。



性が高いといわれている。では、なぜ低地の河川近くに守護所を構えたのかといえば、権益の確保、言い換えれば、直江の津に出入りする船舶の荷に対して課す税を、守護権力自ら徴収していたと見ることもできる。

福島城を府中の対岸に築いた理由は、府中が掌握していた課税の権利を堀氏が奪うことにあったのではなかろうか。

福島城が築かれた土地が周囲より比較的高かったことは、これまでの発掘調査でも、平安時代の灰釉陶器が出土しているので、古代のある時期、既に福島城の辺りに集落などが存在していたわけで、全くの低地ではなかったことを示している証である。

ところで、少し時代が逆行するが、堀氏が福島城を築く四〇年ほど前の永禄三年（一五六〇）に、春日山城主であった謙信公が府内の町人に対して徳政令を出している。この徳政令は、謙信公の府内支配宣言と考えられていて、翻って考えれば謙信公の支配が及んでいなかったことを意味しているというのが大方の見解である。これを根拠とすれば、旧来の慣習を全て否定して支配権を確立するためには、府中の移動が不可欠であったとは考えられないであろうか。堀氏が、福島城を築き府中を移動させる。府中にあった直江の津の機能も併せて対岸に移す。それによって機能は堀氏が造った特定の場所に与えられるもので、出入する荷は全てこの場所を通過するといった政策がとられたのでなかろうか。そして、否定の論理を確定させ、また、安定した収入を確保するため、あえて府中の対岸に権威の象徴である城を建てて、支配権の変更を知らしめたとは考えられないであろうか。

関川の左岸から右岸への移動は、単に政治権力の交替による場所の移動にとどまらず、経済機能の変革、日本海側の七湊の一つ、直江の津がもつ莫大な資金力を掌中に収めようとする大きな意図が働いたと思えるのである。

しかし、福島城はたいへん短命な城であることもよく知られている。諸説はあるが慶長十二年に完成し、七年後の同十九年に廃城となっているから七年の命であったことになる。高田城に移った松平忠輝公は堀氏と同様に権益も移動させたのであろうか。

筆者は、昭和五二年四月一日に上越市教育委員会に採用され、同九日に初回の文化財調査審議会で現在の上越教育大学用地の発掘調査計画を説明した。説明が終わり質疑になったとたん、当時委員であった故青山正久氏が「君のような若造が発掘調査など運営できるのか」と噛み付いたことがあった。それは、説明で事なきを得た。審議会の後、氏は「明日の日曜日に我が家に来い」と伝え別れたが、その用件は私に車を与えるためであったことが訪問で明らかとなった。「保険も税金も納めてある。自由に使いなさい。現場に行くのに必要だろ」と話され、食事をご馳走になり、頂いた車で早速岩木の山屋敷に向かったことが思い出される。

青山氏のような気質が「福島城跡」・「御館跡」の発掘調査や文化財保護の底流にあることを知ったのは、今回紹介した記録の発見が端緒であることを記しておく。

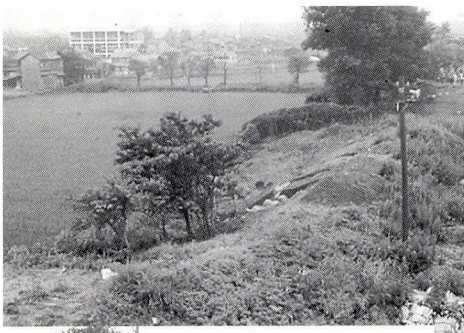
（上越市教育委員会・学芸員）

こで、直江の津を目標とする大型船は直江の津の泊「郷津」に停泊し、艀を使って船荷を直江の津に運んだと考えるのが妥当であろう。

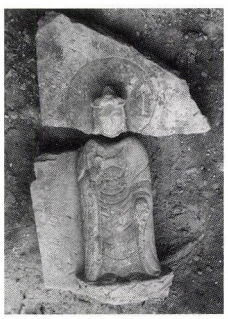
では、直江の津はどこかということになるが、筆者は関川を少し入った御館川付近、というよりも御館川そのものではなかったかと考えている。現在の直江津駅南の区画整理事業で発掘調査を実施したときに見つかった堀で囲まれた館は、想定されていた至徳寺の跡ではなく、越後守護上杉氏の館であった可能

福島廃城をめぐって

中西　聡







上は東南隅櫓付近から田んぼになっている二の丸南堀越しに西方を見る。下は発掘前の大手門付近。前方に古城小学校が見える。左は出土した石仏。

福島廃城

豊臣大名、堀氏が築いた越後福島城。全国的に著名な春日山城と高田城の狭間にあって、地元でもあまり知られていない。ところが、城作りの名人と謳われた熊本城主加藤清正が、家臣を視察に遣したほど名城の誉れが高かったという。それほどまでに著名であった福島城が、今日、知名度が低いことの理由に短命であったことが挙げられる。築城からわずか七年で廃城となり、その地位を高田城へ譲ることになる。

そこで、廃城の通説をまとめると、

①風涛の難がある上に、地域が狭溢であり、国守の城郭としては不適当（『中頸城郡史』）

②荒磯の濤音を嫌い給い（『越後名寄』）

③水入（水害）之地にて（『慶長年録』）

④水軍防禦に不適当（『直江津町史』）

⑤潮風で刀槍鉄砲などの武具がさびる（伝承？）

など、まことしやかに福島城の悪条件が理由として伝えられている。本当だろうか？。ここで注意したいのは、当時の為政者（堀氏）は決して安易に城地を定めてはいない、という常識である。築城にあたっては、綿密な調査を行い決定したはずであり、別稿のとおり、福島が城地として決して不適格な地であろうはずがない。

では、なぜ福島城は廃止されたのだろうか。次に福島城を取り巻く状況について、略年表を示したい。

時代の転換

慶長三（一五九八）上杉、会津へ移封。堀、春日山城へ入城

豊臣秀吉死去

慶長　五（一六〇〇）関ヶ原合戦

福島築城開始？

六（一六〇一）佐渡奉行所設置

八（一六〇三）江戸幕府を開く

十二（一六〇七）福島城完成

十五（一六一〇）堀改易、松平忠輝入封

十六（一六一一）北国街道の宿駅整備

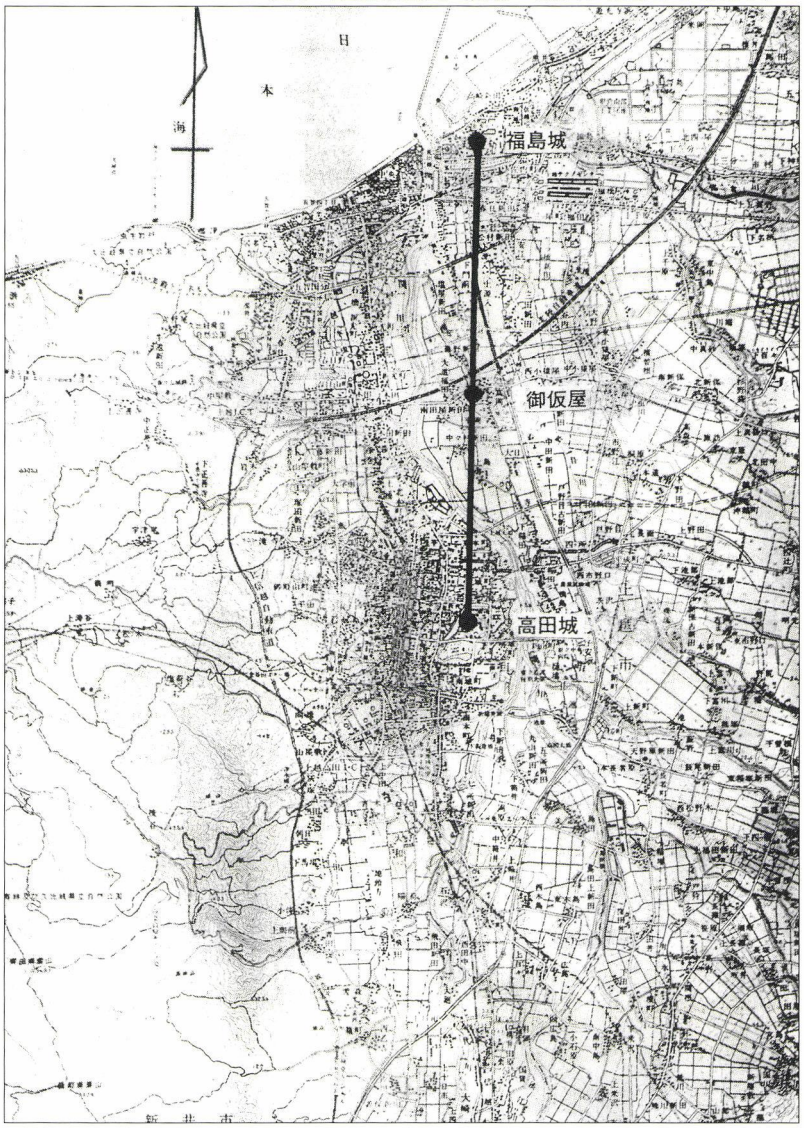
十九（一六一四）高田城完成

略年表から読み取れるのは、政権が豊臣から徳川へと移り、これに呼応するように越後においても領主が豊臣大名の堀氏から、徳川家康の子である松平忠輝へと変わったことである。さらにこのことは、政治拠点が大坂から江戸に移ったことを意味する。越後からみた場合、大坂（日本海沿岸を介したルート）に向いていたベクトルが、江戸（内陸、北国街道を介したルート）へ向きを変えたのだ。いいかえれば、時代の転換点にまさに福島城は位置していたのである。

高田への移城

本誌十七号で、高田移城について仮説を試みたことがある（『「高田」のまちにこめた祈り』）。高田が、地形的・防衛的な最適地という従来の評価ではなく、別の視点から選地の理由を推定してみた。注目したのは、福島城と高田城の位置である。すなわち、双方の本丸を直線で結ぶと、方位は真北と合致し、距離はちょうど八km（二里）であることに気づく（暫定的な政庁といわれる「御仮屋」は双

図１　上越市全図（部分　原図５万分の１を縮小）



方の同一直線上の中間に位置する。図１）。この規則性は、選地にあたって特別な意図があったことを示唆している。その意図を探る手がかりとして、次に示した占いの記事に注目してみよう。

【茶阿局が崇伝に占いを依頼した書状】

越後少将様御むまれ月日。八月九日。今御座候所よりみなみのはうに。しん城御とりたて候。よく候や御らんじ可被下候。

御とし廿二

七月十三日　　かうさうす

松しゆそ　まいらせ候。

【崇伝からの返事】

越後少将様御むまれ年月日御かき付はいしたし候。ことし南へしん城御とりたてなされ候方の事。御たづねなされ候。なにのさしあいも御座なく。一だんとよき方にて御座候まゝ。此よしおふくろ様へおほせ上られ候べく候。めでたく　かしく

七月十四日　　（崇伝）

かうさうす様まいらせ候

（傍点筆者。出典「本光国師日記」『大日本仏教全書』）

忠輝の母、茶阿局の「今いる福島城の南の方に新しい城を築きたいが吉凶はどうか」との問いに、幕府の政僧、金地院崇伝は占って「一段と良き方」と返答している。占いにより、福島城から真南へ二里の地点が築城の地として決定された。規則性にしたがい、あえて現在地に高田城を築いたのは吉祥による判断、との仮説である。

福島城の再評価

崇伝の「一段と良き方」を吟味してみよう。この語句には「福島も良い所だが、高田はさらに良い所」の意が伺える。すると、通説のような悪条件から福島城を廃止したという否定的な理由ではなく、むしろ時代の大きな転換を背景に、より良き場所（新天地＝高田）に明確な意図をもって移城したという肯定的な理由を見出すことができよう。そして、明確な意図こそ、占いにより裏打ちされた平和な城下町の建設ではなかったか。もはや高田は、戦争を前提として計画された都市ではなかったのではないか。時代は、すでに豊臣から徳川へ移っていた。

福島城は、結果として七年という短命で幕を閉じた。それは時代の転換点に位置したがゆえの、時代に翻弄された城の宿命といえるのかも知れない。

これまで、高田移城の正当性を評価しようとするあまり、逆に福島城を不当に扱ったきらいはなかったか。築城四〇〇年の節目にあたり、福島城の名誉を回復するとともに、その意義を改めて評価したい。

（上越市教育委員会・学芸員）

越後・福島城を掘る

大橋康二　佐賀県立九州陶磁文化館館長

思えば昭和四四年八月の暑い夏。六十人近い大所帯の学習院大学史学部考古学班のクラブ員が、直江津に集まりました。直江津市教育委員会の世話で夏休み中の古城小学校を借りて寝泊りする一週間の合宿に入ったのです。大学生が食事やミーティングをするのに、小さな小学生の椅子と机からにょっきり体がはみ出してほほえましい光景を思い出します。

大規模な近世城郭でありますから、本丸の南半分だけの調査でしたが、小学校の校舎を挟んで、大勢が四、五人のチームを組んで、それぞれの持ち場の地区の発掘を開始しました。笛による号令が一斉に作業開始、終了の合図。疲れてくるとこの終了の笛が鳴るのがなんと待ち遠しいことか。

この発掘調査の大変さは別の面にもありました。それまで中世の武蔵、相模などの土豪の山城、平山城を発掘調査してきたため、巨石を石垣に用いた大規模な近世城郭は子供が大人と相撲するくらいに大変でした。今ならば、半年とか一年くらいの長い時間をかけて、それなりの成果を挙げられるところでしょうが、当時は学生が夏休みを利用して発掘するので、発掘期間は一、二週間の短期間が普通の時代でした。

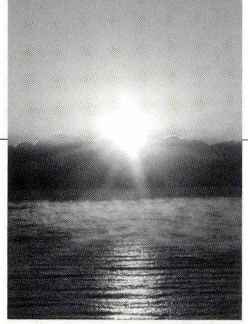
なぜ私ども、学習院大学史学部のクラブ活動で発掘することになったのか。当時はこうした城郭を発掘調査する考古学者が少なく、私どもの指導者奥田直栄先生がさかんに行っていたからでもありますが、それ以上に奥田先生が、越後の大名堀氏の子孫であったからと思います。

学校内ですから、固く整地され、グランドなどはシャベルでは歯が立たず、つるはしを使って地表面を砕き、掘り進まねばなりませんでした。それにパワーシャベルという重機の力を借りたのも初めての経験でした。一週間という短期間で成果をあげねばなりませんでしたから、この重機は強い味方になりました。

城として機能したのが慶長十二年（一六〇七）から十九年（一六一四）の七年間という短期間の城で戦争が行われなかったので、陶磁器などの生活遺物が破損し廃棄されることもわずかでしたから、発掘していても遺物が土中から出てくることは稀でした。もっぱら石垣などを掘り出すことが主眼。ほとんど加工していない巨石を使った石垣、そして、大手門の枡形部は工夫され、より丁寧に切り石を積んだ石垣が土中から現れました。こうした石垣の特徴は、豊臣秀吉の朝鮮出兵時の拠点として作られた肥前名護屋城（佐賀県）に見られ、堀秀治も朝鮮には出兵しませんでしたが名護屋城に滞陣。名護屋城の陣跡のなかでも堀秀治陣跡は、豊臣秀保、徳川家康、前田利家などとともに最大級の規模でした。この秀治が福島城の普請を始め、完成を見ずに春日山城で亡くなったのですが、勇壮な大城郭を意図したのも名護屋城などに影響されたのではないでしょうか。

文学の旅

柿崎区 角取 つのどり 上越市



蓑笠の人 さりゅうのひと 水上勉





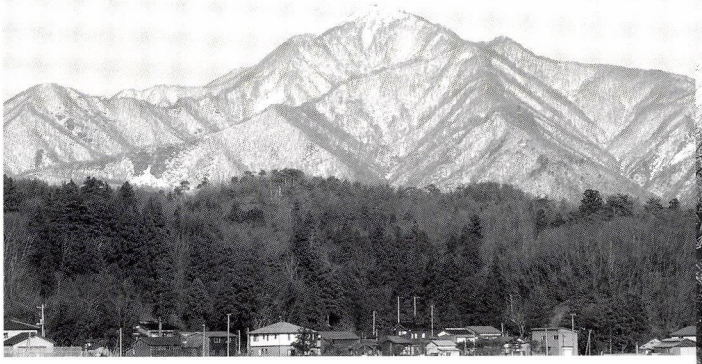
角取の集落
奥の土蔵は老舗の蔵元
右手の山門は弥三郎の父母が眠る菩提寺か…
左の写真は冬の陽射しを浴びる角取の集落

水上勉は、度重なる飢饉の時代にあって、破れ庵に起居し経も読まず法も説かず、乞食（こつじき）三昧の生涯をおくった〈大愚良寛〉を考え、当時の越後の農民事情を探っているうち、郷土人物誌『越佐草民宝鑑』を手に入れる。それには明治十七年、田川完助という人物が水戸彰考館において天保時代の写本を発見し、複写したと誌されているだけで、原著者は不明ということである。

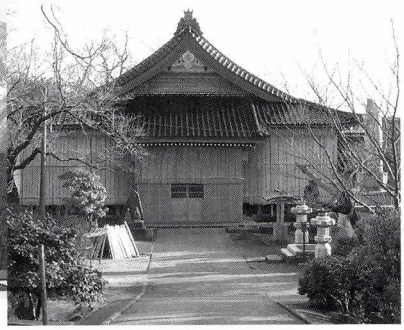
水上勉は、そのなかに良寛と同じ宝暦八年、柿崎村角取（つのどり）に生まれた「水呑弥三郎」を見出し、良寛の生涯を弥三郎のそれと交錯させながら『蓑笠（さりゅう）の人』を書くことになる。

作者はその次第を次のように書いている。

——良寛と同じ年、すなわち宝暦八年に生れた一人の水呑百姓が、良寛の生地出雲崎と程遠からぬ柿崎の地の米騒動に連座して佐渡遠島となり、文化二年に四十八歳で帰国し、数年後、蓑笠を着たまま生地の墓地に佇み、立亡（りつもう）している。——人はその誕生の家柄においてかくも違うものかと、ふかい感慨にうたれた。じつはこの物語を書きすすめる気持にもなったのである。考えてみると、良寛もま



霊峰米山



静かに冬囲をする善導寺
弥三郎が修行し、後に葬られたと伝えられる
柿崎区上町

た蓑笠の人といえる。

そして「宝鑑」は、弥三郎を

水呑弥三郎は、生涯蓑笠の人なりき、宝暦八年柿崎村角取に生れ、長男にして弟妹二人あり。幼時にして無常心あり、長じて才智にすぐれしため、（父親の虎市は）村肝入りの許しを得て上町（かんまち）善導寺内普門院浄海上人に漢字を学び――。

と記録している。

彼は出家を試みるが許されず、半農半漁の生活を送るうち、二五歳の天明三年、一揆の首謀者の一人に加わる。

『柿崎町史』（昭和十三年刊）には、この飢饉で起きた「柿崎米騒動」のことが詳しく書かれおり、水上勉も読んでいる。要約すると以下のようになる。

柿崎地方は白米一升、平年の七六倍の二百文となり、当時は甘藷の栽培も普及していなかったから、下層の人たちの困窮は絶頂に達していた。当時の柿崎は天領で出雲崎の代官の管轄下にあり、また米価の高騰は大地主と酒造業者が米を隠匿し、困窮する村人に同情の余地も見せていないからだと、十一月二日夜、漁師重左衛門、善三郎等を首謀者に、下條・角取・高寺などの村人四百余名が一斉に蜂起し、上小野の素封家を襲い、さらに角取の酒造家を脅して酒食を命じ、酒樽を打ち割って引き上げた。しか一揆は、出雲崎代官所によって裁かれて終わる。

町史のなかに弥三郎の名前は見えないが、「宝鑑」は、佐渡に流され金山で働いていた弥三郎が、二十年を経て帰国してみると、すでに生家はおろか親弟妹、妻子の姿も無かったと伝え、その後の弥三郎の定住なき放浪は、乞食と作男だったろうと推察している。

ある時、大島川ぞいに降りてひと夏を顕聖寺に住み、冬近くなってまた消え、そして、

――文化八年のことなり、秋末の一日、人びとの冬囲いとて、茅を雁木にくくりつけて、雪よけの仕度など急がるる思いの夕暮れ、角取村の菩提寺裏にありし、永代墓地に詣でし六十がらみの両目患いたる乞食あり。無縁塔の前に来たりて、百日紅の幹によりかかりたるまま動かずにいたり。男はこと切れてあり。――人相の変わり果てたる弥三郎と分かりし時、村人らこぞりて泣きあいぬ。せめて父母が眠りし墓地を見んものと来るならん、と云いあえり。立ちたるままの死亡なりき――。

弥三郎は善導寺に葬られた。

さらに「宝鑑」は、弥三郎が生前、村々で語った僧のごとき言葉を言行録として収録している。

蓑笠を着け放浪者として生涯を閉じた二人。作者は、

良寛は、その生涯において禅を実践した高僧として、今日も仰がれる。水呑弥三郎のことについていまは語る人は少ない。

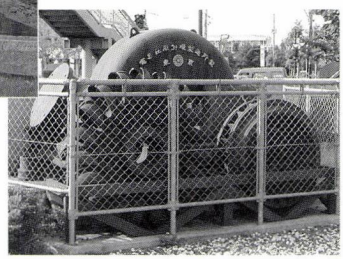
と結んでいる。

霊峰米山を眼前に、田畑に囲まれて静まりかえる角取の集落に佇むと、水上勉に『蓑笠の人』を書かせた『越佐草民宝鑑』が、じつは柿崎米騒動を巧みに滑り込ませた、作者自身の〈虚構〉とは、とても信じ難い。

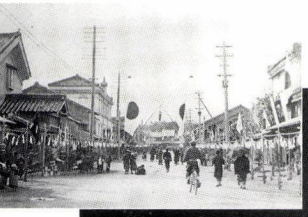
参考
水上勉全集　第十三巻　中央公論社／柿崎町史　昭和十三年刊　／歴史小説の種本〈歴史文学作品における虚構の種本〉　磯貝勝太郎　日本ペンクラブ電子文藝館

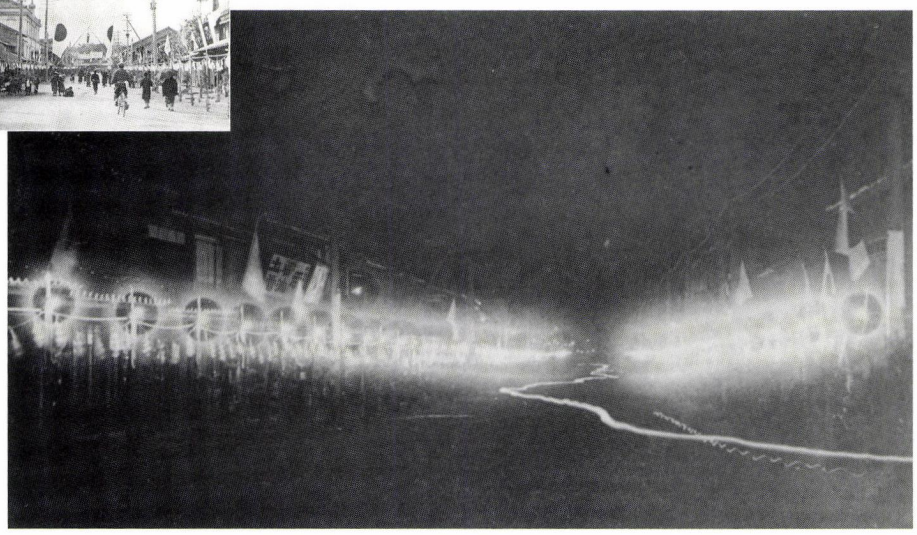


蔵々発電所のコンクリート製の導水管



蔵々発電所の最初の発電機（旧高田図書館跡）





大正4年11月10日　直江津新町通りの夜景
大正天皇即位式記念のイルミネーションが祝賀の人々の目を驚かせたに違いない。右下の白線は自転車の灯火。上は当日の昼間の風景。



國友末蔵

上越地域電源開発の父

明治十一年（一八七六）、東京電信中央局開設祝賀晩餐会で、工部大学（後の東大工学部）のイギリス人教授エルトンの指導の下で、グローブ電池を使ってアーク灯を点灯したのが、日本の電灯の始まりと言われ、その三月二五日を日本電気協会は「電気記念日」に制定している。

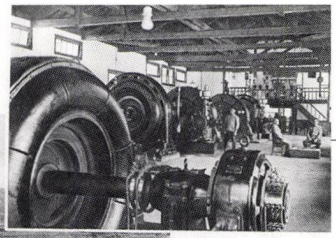
電気事業としては、十年後の明治二〇年（一八八七）東京電灯会社が日本橋で点灯したのが始まりとされている。エジソンが世界で初めて電力供給をしたのが明治十五年であるから、日本の電気事業の開始は大変早いことになる。

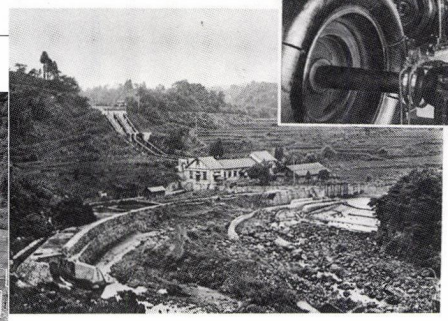
その後、神戸・大阪と電気事業は拡大して行くが、火力発電であるため安定した供給の確保が難しかった。

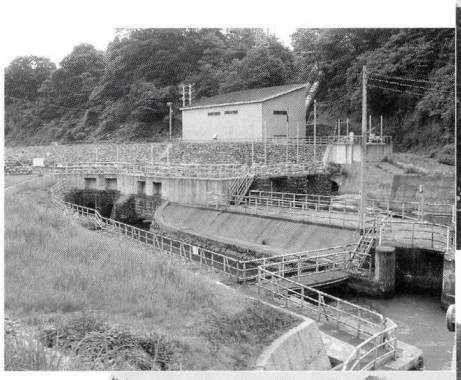
水力発電は、明治二四年（一八九一）に京都市営で、琵琶湖疏水を利用した蹴上発電所が日本初である。

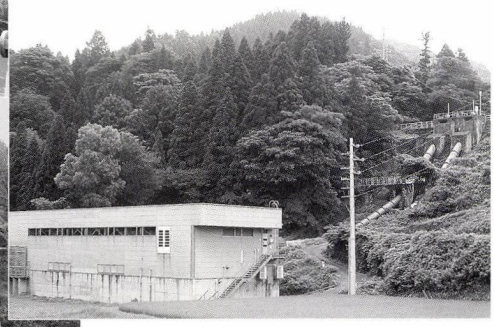
新潟県内では、明治二九年（一八九六）に新潟電灯株式会社、北越水力電気株式会社が相ついで認可されている。

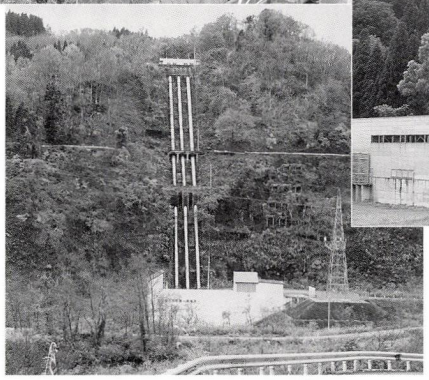
國友末蔵＊
＊の付いている写真は「創業弐拾周年記念帖」より


部内所電發々蔵




蔵々集落の上流に設けられた取水場。石積みに当時の面影が残る。




大谷発電所

上は建設当時の蔵々発電所＊
下は現在の蔵々発電所

上越は明治三九年（一九〇六）に上越電気株式会社が発足する。しかし、発足までには多くの紆余曲折があった。

和田村柳井田（妙高市＝新井市）に生まれ、大倉村長・郡会議員を歴任した金子伊太郎、板倉町（上越市板倉区）出身で「高田新聞」の創刊・社長、県議・国会議員を歴任し、地域事情に精通した高橋文質を中心に、資本金二十万円、社名を上越電気株式会社として出資者を募集した。

しかし反応は鈍く、一度は出資しておきながら「山師的事業」の前途を危ぶみ、手を引く者もあった。

それでも倉石源造、川合直次、古川長四郎、富永孝太郎等の地元の有力者を発起人に加え、ようやく三八年一月、逓信大臣あてに火力発電認可の申請を出した。

認可申請で分かるように、当初は火力発電の計画で、関町（南本町二）に発電所の設置を計画していたが、石炭の安定供給や採算面で不安があり、当時、水力発電の父と言われた大田黒重五郎に相談したところ、大田黒は水力発電の優位なことを力説して、強力な援助を約束し、同時に芝浦製作所の技師長岸敬二郎を紹介してくれた。

金子は以前、矢代川・関川の洪水に際して、水源や流域の調査を行っており、それに基づいて矢代川に小規模な水力発電所を建設しようと考えた。しかし、技術顧問の岸敬二郎は、金子を伴って関川水系を調査し、名香山村蔵々（妙高市＝妙高高原町）に適地を発見した。

そのために翌三九年二月、水力発電に仕様を変更して、再度発電認可申請を出している。

六月、営業許可が下りると事務所を仲町から寺町来迎寺に移し、会社設立と事業開始に向けて本格的に動き始めた。

八月、資本金二十万円、

専務取締役社長　大田黒重五郎
専務取締役　金子伊太郎
技術顧問　岸敬二郎

で、上越電気株式会社が正式に発足した。


第２代社長
清水義冝＊


技術顧問
岸敬二郎＊


初代社長
大田黒重五郎＊


創業の功労者
金子伊太郎＊

大田黒重五郎　慶応二―昭和十九年
幕臣の家に生れる。熊本の旧家大田黒家の婿となる。三井物産から芝浦製作所に入り電気機械のトップメーカーにし、水車専門の電業社原動機製作所を育てる。箱根・大井川・九州・鬼怒川の水力発電に参画。音楽評論家・大田黒元雄は子息。

翌明治四十年五月三日、蔵々発電所の発電許可がおり、その日、新井・高田・直江津に送電テストを開始、五月十日、高田の本町二丁目と三町目の馬出の十字路に杉のアーチを建て、金子伊太郎揮毫の「啓神秘」の額を掲げて、イルミネーションで飾って正式に点灯した。

今までの石油ランプとは比べものにならない明るさに、人々が驚いたのは想像に難くない。明治二九年生まれの中戸賢亮は『直江津こぼれ話』で、なお当分は、ランプやろうそくが用いられていたが、

――一戸一灯か二灯で、五ワット、一〇ワットであり、それも二室兼用で、コードで移動して便宜をはかったものだ。祇園祭には荒川橋近くの十字路に大アーク灯がともされ、その明るさにそれこそ目を驚かせ、人々を驚かせるほどであった。――

と、その驚きを書いている。

こ

の電気事業を進めるために、技術顧問の岸は、京都帝国大学工科大学電気科で水力発電を専攻している二六歳の青年、國友末蔵を推薦した。彼は卒業と同時に上越電気株式会社の技術主任として招かれ、生涯を上越の電気事業に尽くすことになる。

國友家は戦国時代から続く、近江の国友村「國友鉄砲鍛冶」の出である。江戸時代に鉄砲商となり、幕末には望遠鏡も製作するようになっていた。維新後京都に出たが、その技術を買われて国産の活版印刷機を製造し、輸入品よりも安価で精巧であるといわれ人気を博した。

末蔵は、その國友藤九郎・ヒロヱの四男として、明治十四年（一八八一）十一月十七日、京都市下京区に生まれている。

八

月五日に着任した末蔵は、ただちに蔵々発電所の建設に取り組んだ。

蔵々は、関川がヘアピンのように大きく蛇行し、平成七年に発生した〈7・11水害〉で大きな被害を受けたところである。大掛かりな復旧作業が行われたが、関川最大の屈曲部は今も見ることができる。発電所はこの蛇行と落差に着目して建設されている。

八月十八日、取水口、土砂溜、水路の掘削などの工事から始まった。

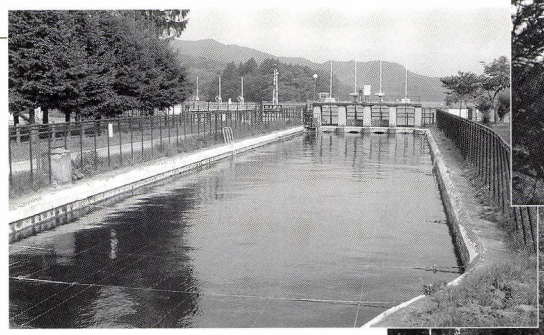
蔵々集落の関川上流に水門と土砂溜を設置して五〇〇メートルの導水トンネルで導き、サージタンクから三三メートルの落差を利用して発電する。

工事には数々の新技術を開発して行われたが、発電も水車を除きすべて国産で行われた。ことに芝浦製作所製、五〇〇キロワット三相交流発電機は、国産初の最大容量の発電機であった。

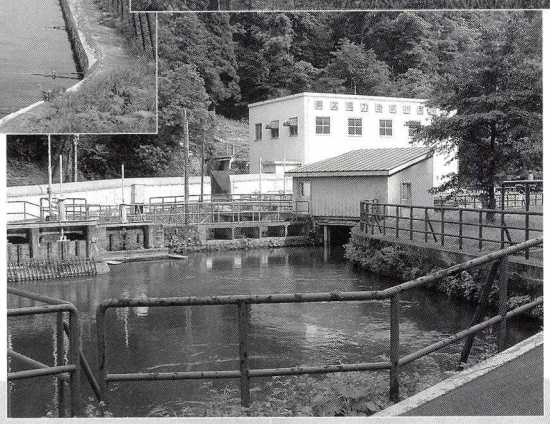
工事は長雨に続く積雪に悩まされ、予定より遅れながらも四十年五月一日竣工した。

以来、百年後の今日まで明かりを灯し続けることになったのである。

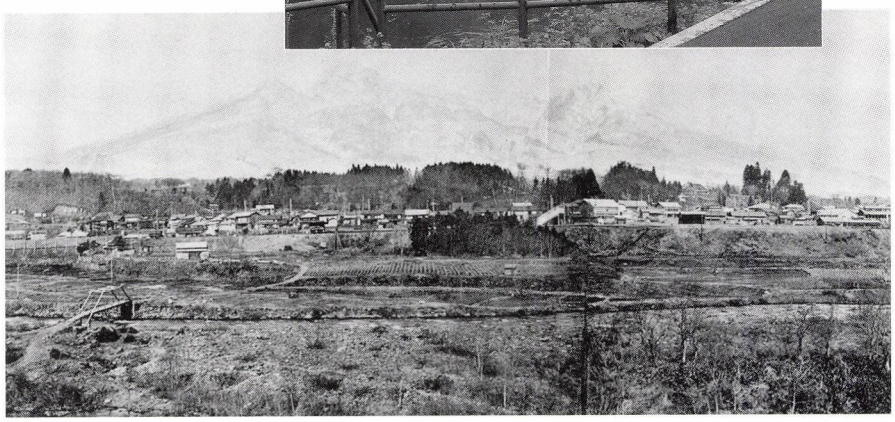
引き続き関川に沿って発電所が造られていくが、國友末蔵の仕事のなかで特筆されるのは、池尻川発電所の建設であろう。







右上は昭和３年当時の野尻湖の池尻川発電所取水口付近＊。上は現在の取水口。右は池尻川発電所。



妙高山を背景に田口駅（妙高高原駅）方向を見る＊

関川の渇水期の発電量を増加させるには、野尻湖の豊富な水量は大変魅力的であった。しかし野尻湖への河川の流入量が少ないため、発電用に落水した水量を回復させるのは容易ではなく、頸城平野への潅漑に支障をきたすことになる。その難問解決のために末蔵は日々頭を悩ませていた。

ちょうど昭和四年、エジソン電灯発明五十周年記念祭が催されることになり、末蔵も使節団の一人として渡米した。帰途、彼はヨーロッパを回り、ドイツでライン川の発電所を視察し、その揚水式発電を採用することにした。

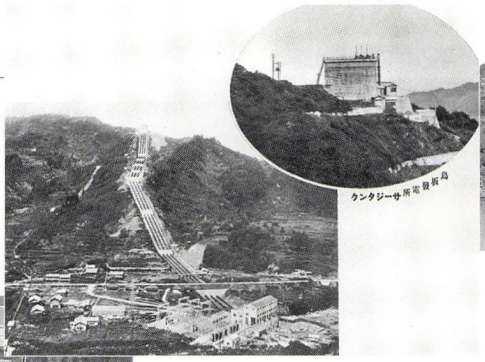
発電で減水した野尻湖へ、高度差七五メートルを揚水機で関川の雪解け水を汲み上げて入れようという計画である。三月下旬から五月までに揚水し、低下した水位を潅漑時期までに回復しておこうというのである。

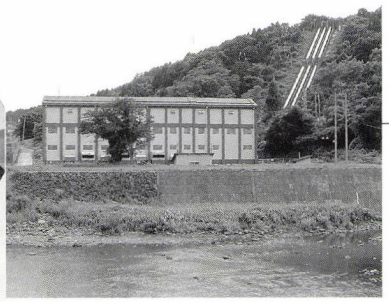
日本最初の揚水式発電所、池尻川発電所は昭和九年に竣工した。これによって関川の渇水期を克服し、下流、総有効落差五八一メートルに八つの発電所の建設を可能にした。

そればかりではなく、頸城平野に安定した潅漑も可能にし、長年の懸案であった関川・野尻湖に水利権を持つ農業用水と発電の共存が図られるようになり「一本の関川を二本に利用するものだ」と賞賛されることとなった。

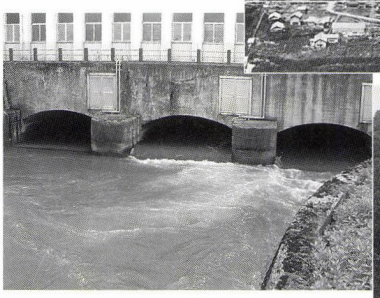
昭和十四年、鳥坂発電所の放流水をずい道で導いて一万キロワットの発電を行う板倉発電所が完成し、別々に取水していた上江・中江用水等に一括して大量に放流できるようになった。これにより共存関係はいっそう強まり、笹ヶ峰ダムの建設へと発展していく。

なお、池尻川発電所は、野尻湖の貯水量を増加させるために湖底を深くする工事を行っているが、そのときの工事に際して会社から寄付が行われ、湖畔の遊歩道整備、長野県営ホテル（野尻湖ホテル）建設の資金に充てられている。

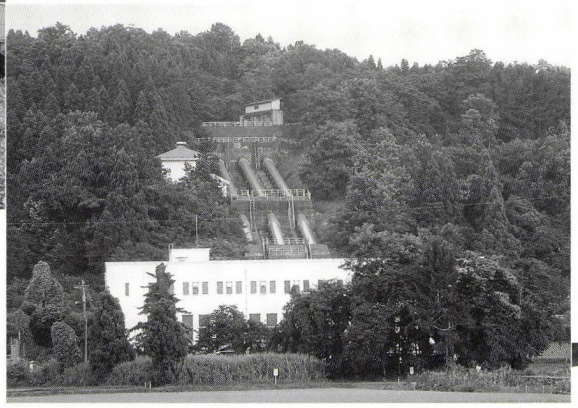




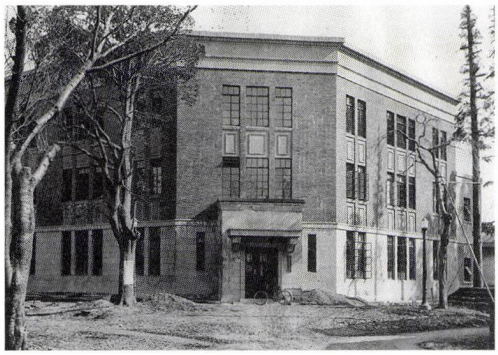
上は現在の鳥坂発電所
左は創業当時＊



板倉発電所排水口



ゑしんの里から望む板倉発電所



新築間もない中央電気本社屋
（現東北電力高田営業所）＊



板倉発電所の導水管と上江用水が交差し、
導水管の途中で上江用水に分水する。

資本金二十万円で発足した上越電気会社は、明治四三年には六十万円に増資、四五年、糸魚川電気を合併して越後電気に、大正十一年、松本電気と合併して中央電気株式会社として発展して行くことになる。

中央電気株式会社は、社長に清水義宜、副社長に当時田口の日本亜鉛の社長でもあった松本電灯社長の今井五介、専務に国友末蔵という布陣で始まった。

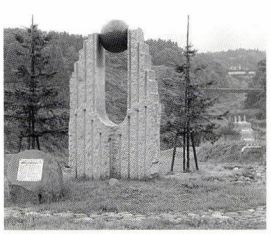
中電は東京へ電力を供給するだけではなく、清水義宜の尽力で多くの工場を誘致していったが、昭和十七年、戦時配電統制令により分割されて中電は解散、戦後、関川水系の発電は東北電力に引き継がれ今日に至っている。

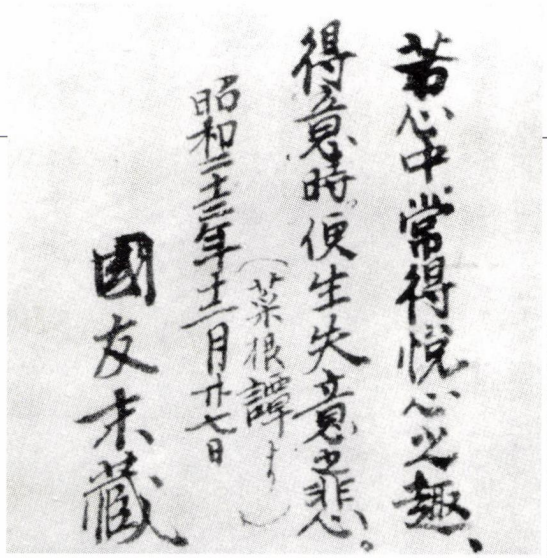
國友末蔵は電力の開発だけではなく、文化活動の援助、スポーツ団体の会長など市民生活にも大きな貢献をし、市民から敬愛される存在となっていた。

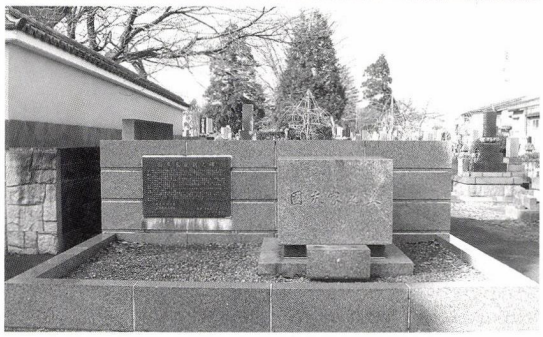
昭和二八年、高田市名誉市民条例が制定され、議会は満場一致で末蔵を推して、最初の名誉市民となった。

晩年は、悠々自適の生活を送っていたが、昭和三五年十月十七日、七九歳の生涯を閉じた。

7．11水害の復興を記念して蔵々集落に建てられたモニュメント。

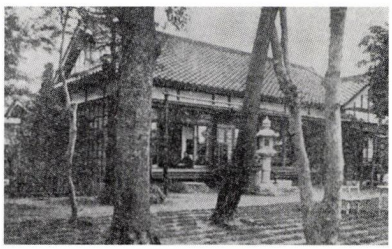






上　知人に贈った「菜根譚」の一節（「頸城と書」より）
下　國友家墓地　末蔵の墓誌が刻まれている

北城町にあった國友邸



関川水系の電源開発は、単に〈発電〉と言うだけではなく、地域開発に大きな貢献をしている。

上越電気（中電）創立二〇周年事業として、当時の価格で十万円をかけて農村部に昼間用の送電を行い、農業用小型モーターを普及させ、上越地方を農業電化の先進地と言わせるまでにしている。

関川水系の発電所は、信越線に沿って設置されているが、これは他では例を見ないことである。

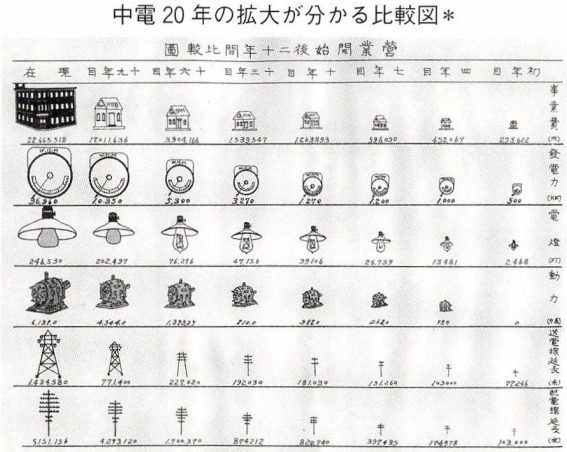
明治十九年にいち早く開通した信越線が関川に沿うように敷設されており、発電所建設資材の輸送に大いに役立ったが、それが結果として電力・水資源・交通が同一線上に存在する特異な電源地帯を形成することになり、多くの電力型近代工業を誘致する力となった。

地域に「電気の明かり」をと願った人々、その願いを支えた電力の先覚者、その力が、國友末蔵という一青年技術者を「上越の電力の父」にしたと言えよう。

上越地域に電灯の明かりが灯されてから百年。末蔵が最初に建設した蔵々発電所は、県内に残る最古の発電所として、今日も電気を送り続けている。

■参考
新潟県人物百年史　頸城編
創業弐拾周年記念帖　中央電気株式会社
上越地域電源開発の父　国友末蔵（国友末蔵展　上越市立総合博物館）

中電20年の拡大が分かる比較図＊



建物さんぽ　その五

海辺の幸福感

今冬は吹雪も少なく、二月初めというのに、日本海は春の海。有間川河口の堤防をこわごわと伝い歩きで西方の米山を眺め、浜辺におりれば、打ち上げられたゴミがいっぱい。その中から、面白い形の流木をいくつも拾いました。波に洗われて、そのままアート作品になってしまいそうなものばかり。「自然からの贈り物」としてゴミにせず、子ども向けの自由な木工教室の素材として使わせていただくことにしましょう。

ここに「有間川漁港フィッシャリーナ」が建てられたのが六年前。ちょうどその頃、桑取川の谷間（たにあい）の山から直江津火力発電所建設用の土砂が大量に採取され、杉林が伐採されました。

①地球環境規模で、森林・河川・海の緩やかな生命循環システムを考える。

②全国的な林業不振の中で、持続可能な人工林を「地域産業の資源」として見直す。

③「里山」を背景とする中山間地の生活文化を継承し、過疎による荒廃から守る。

広域合併まで上越市唯一の「中山間地」であった桑取・中ノ俣地区に、これらの動きが切実な現実の課題として迫っていました。

「今、必要なのは埋立て用の土砂だけ。オマケに付いてきた杉は厄介者」という事情の中で、NPO[*1]と間伐材利用団体が呼びかけ、伐採木の再利用と一般市民向けの様々な啓発活動が繰り広げられてきました。その片隅に、私も小さく加わっていました。

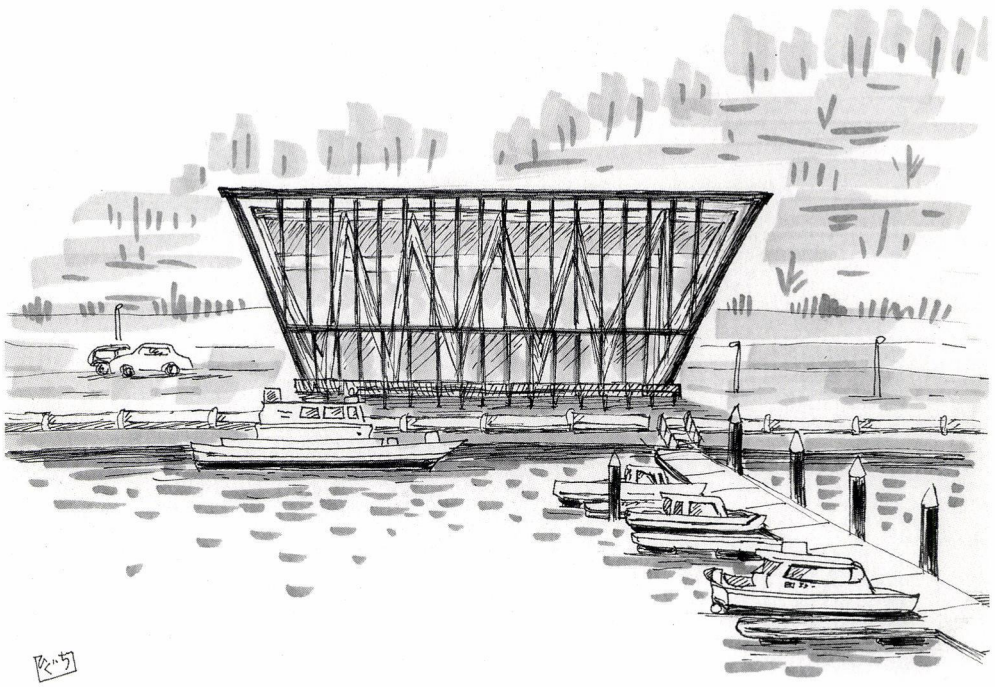
子ども向けの木工教室も、くわどり湯ったり村や中ノ俣地球環境学校も、公共施設や学校への間伐材製品導入も、地場産杉材による住宅建設も、桑取の伝統行事復活と里山文化伝承も、それぞれ形として現れたものは異なっても、ある意味では同じ方向を目指していたのです。

建物は、渋いグリーンの色合いで統一された小粋な姿で、海と空と山の景色をきりりと引き締めています。林業地の大分県中津江村で、長年にわたり、杉丸太の形状を生かしながら、巧みな構造ディテールを開発してきた建築家の黒川[*2]哲郎さんが、NPOの趣旨に賛同してデザインを工夫してくれました。その実績と地域活性化を願う様々なメッセージが目に見える形となり、日本海の海辺に実を結びました。室内は太めの丸太と細い角材が立体的に組み合わされ、手入れの行きとどいた杉林が再現されているかのようです。

目の前には係留桟橋があります。建物は遊漁船の受付と利用者の休憩施設で、トイレとシャワーも完備。釣シーズンなら、熱いコーヒーと軽食、地元の山菜販売もあればいいのに……。予想通り、長野方面からの常連客も多いそうです。

背後の山には杉林の濃緑色と落葉樹のシルエットが浮かび、国道八号線には長距離トラックがせわしく往来し、時々、北陸線の列車が通り過ぎます。近くには、桑取川を遡上する鮭の加工施設もあり、海と森の恵みが重なる場所です。

ガラス張りの明るい〈杉林〉からは、漁船とボート越しに日本海、米山、晴れなら佐渡まで一望。「やっぱり海はいいな。こんな日は、ここで、ぼーっとしたい」。受付のおじさんも、今日はにこやかでゆったり。大荒れの日は、潮吹雪がザバーンとおそいかかって来るのか、ガラス面に残った塩の結晶が明るい陽射に浮かびます。海は、ただ、そこにあるだけで、幸福感をわけてくれました。



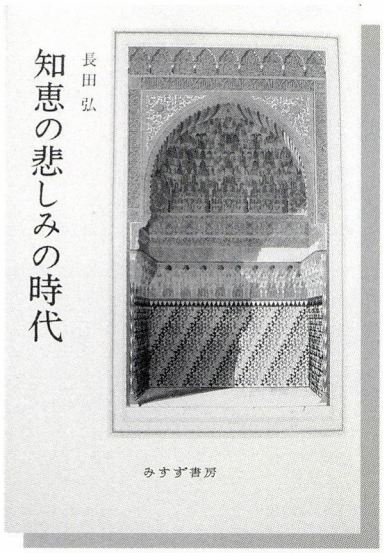


＊1　NPO法人「木と遊ぶ研究所」、間伐材製品の開発製作を行う協同組合「ウッドワーク」、NPO法人「かみえちご山里ファン倶楽部」がこの動きの中で設立された。

＊2　黒川哲郎　東京藝術大学教授　建築設計事務所「デザインリーグ」を主宰し、十年以上前から、小径木による「スケルトンログ構法」を研究開発。中津江村の各施設は、ワールドカップサッカーで、カメルーン選手団のキャンプ地となり、全国的に取り上げられた。

文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

■読書びと



知恵の悲しみの時代

長田 弘著

みすず書房刊
二六〇〇円（本体）

今年も旧い友人たちと山間の温泉宿に来ている。淡雪の降る渓流沿いの野天風呂につかりながら昨今の四方山話を交わす。〈団塊の世代〉と揶揄されながら勤め人生活を貫いてきた男たちの話は他愛もなく、ひたすらに私的であった。

夜明け前の独り湯浴みの時に、今日ここに居ないYのこと（高校時代より私家版の詩集を持ち今は房総にて夫婦で小さな出版社を営む）を何故か懐かしく想い出した。そして当時暗唱するほど読み込んだ、忘れられない一篇の詩をも。

われら新鮮な旅人
一人は殺され一人は自殺し二人が過労で死んだ
Kという同じ頭文字をもつぼくたちの六十年の
死者たちへの奇妙なレクイエムのこころみ—

花冠りも　墓碑もない／遊戯に似た／懸命
な死を死んだ／ぼくたちの青春の死者たち
は　もう／強い匂いのする草と甲虫の犇き
を／もちあげることができないだろう。
汗に涙が溶け／叫びを喉がつかむ、ぼくたち
の／握りしめるしかなかった拳のなかで／
いま数えることのできない歳月が／熱い球
のように膨らむのだ。
夏のサーカスのように／ぼくたちの青春は
不毛な土地を／巡業して廻っているのだろ
うか。　（以下略）

長田弘（おさだ ひろし）は一九三九年福島県に生まれ早稲田大学文学部独文専修を卒業、一九六〇年、詩誌「鳥」を創刊する。雑誌「現代詩」「詩と批評」を編集、六五年には第一詩集『われら新鮮な旅人』（思潮社）、詩論集『抒情の変革』（晶文社）を世に問い一躍若手詩人の旗手となった。昭和から平成の年号の流れを緩みなく漕ぎつづけ、『深呼吸の必要』『人はかつて樹だった』ほかの詩集、『本という不思議』や『定本　私の二十世紀書店』など読書に纏わるエッセイを数多く世に送った。

そして〈不戦六十年〉に拘る長田は『知恵の悲しみの時代』を二〇〇六年十月に上梓する。

表題は、ロシア公使としてテヘランで虐殺されたグリボエードフが遺した戯曲名による。彼を悼みプーシキンが寄せた言葉、「すぐれた人々は跡形もなくわれわれの許から消えてゆく。われわれは怠惰で無関心である。」を糧に、失われていく二十世紀前半、〈戦争〉の時代の思潮と市井の日常を見詰め直す仕事。主に昭和の戦時下に出版され多くは無名の本の横貌を描くことで、明治期に水脈を掘り敗戦までこの国を潤していた〈精神の伏流水〉を汲み上げる。

この新しい試みのブックレビューに長田が選んだ二十九篇の幾つかを挙げれば、二十五歳で縊死する北村透谷が遺した、アメリカの国と民を熱く説く評伝『エマルソン』。刊行された一八九四年に日清戦争の戦端が開かれ、敗戦まで五十年続く戦争に基づく時代がはじまった、と書き起こされる。つづいてリンカーンの『演説集』や、旧憲法を解説する『公民教本』が語る国家の目的と理想、木村荘太の手に成るローマ皇帝『マルクス・アウレリウス伝』、等々と並ぶ。

中井正一らの小新聞『土曜日』、内閣情報部編輯の『週報』や学徒兵の『陣中日記』など時代を映す記録、米川や大岡昇平ほかの訳書。また児童書への発言も多い長田の眼は『エミールと探偵たち』『トム・ソーヤーの冒険』も見逃さない。

ですます調の文体に愛惜こめて語られる、消えていく時代に善く生きた人々の、自立した倫理と優しさ、勁さとの交感が静謐の時を刻む。

処女詩集の題になった長詩を長田は斯く結ぶ。

「愛するひと、／愛してください。／死者は花冠
りも墓碑もいらないのだ／死者たちに完璧な
死を—／ぼくたちに子供を／子供を！」

四十年前にこう歌った青春の旅人は人生の白秋を迎えた。私の愛した人も、私の中の死者も。春浅き北アルプス山麓を旅しながら時空を超えて言の葉の力と同伴している。　（信）

カメラの眼

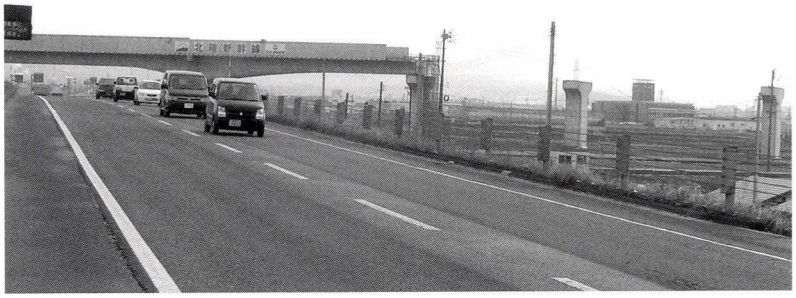
新幹線がやってくる！



飯山トンネルを出ると、新幹線はいっきに頸城平野をかけ抜ける。トンネル出口の真上に上江用水が通る。（板倉区山部小学校付近）



脇野田駅も変わる



国道18号線を跨いで西へ

平成二六年（二〇一四）、北陸新幹線がやってくる。

東京から一時間五〇分、大阪からは三時間五〇分で一時間近く短縮されることになる。来る人よりも、みんな出て行ってしまうのではないかという不安がつきまとう。

脇野田駅と併設される新幹線駅建設予定地の整備も進んでいるが、新幹線駅の乗り降りの便にも不安が残る。

あと八年、どのような準備が出来るのだろうか。



平成10年、長野・上越間の起工式で使われた「鎌・鍬・鋤」が脇野田駅に展示されている。

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

小布施のまちあるき

横山由雄 調査役



「天保一三年秋」と記録されています。半纏（はんてん）に草履姿の老人が、冷たくなり始めた高原の風に乗ってふらりと小布施にやって来ました。

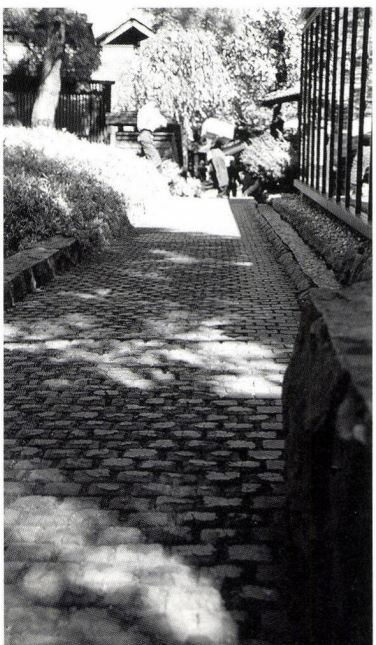
当時、小布施には高井鴻山（たかいこうざん）という豪商がいました。鴻山は若くして京都に、後年江戸に遊学し儒学、陽明学、蘭学に触れるうちに、大阪の大塩平八郎や儒学者の佐久間象山、その門弟である若き日の勝麟太郎（海舟）らと親交を結んだといいます。

やがて、寛永・享保・天明に続く江戸四大飢饉の一つとされる「天保の大飢饉」のなか、鴻山は小布施に帰郷し家業を継ぎました。

家業である「桝一市村酒造場（ますいちいちむらしゅぞうじょう）」は創業が宝暦五年といいますから、二五〇年以上にわたり連綿と日本酒を造り続けている老舗です。鴻山は桝一の一二代目の当主でした。

小布施は、周辺の村々の産物が集散する六斎市（三と八の日）が立ち、中仙道追分宿から分かれる善光寺街道、善光寺西街道、谷街道、飯山街道、大笹街道が近くを走り、人と物の往来をなしていました。さらに千曲川という水の道も切り開かれ越後日本海へと繋がれました。小布施は北信濃経済の中心地の一つであったようです。その小布施豪商たちの一人として高井鴻山は位置します。

経済の充実は文化の成熟へと結実します。小布施の繁栄は必然的に多くの文人墨客を招き寄せ、民度の高まりにつれて小布施独自の文化が生まれてきたものと思われます。



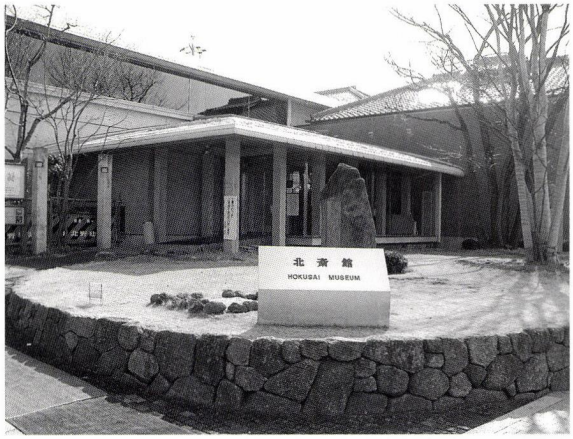
ときあたかも明治維新に向かって幕末の怒涛の波が押し寄せようとしている頃、江戸からはるばる一人の老人がふらりと小布施桝一酒造場の門をくぐりました。

この老人こそ『富嶽三十六景』など数々の傑作を生み、フランス印象派にも大きな影響を与えた浮世絵師、葛飾北斎（かつしかほくさい）その人でした。このとき北斎は八三歳、鴻山は三七歳でした。鴻山は北斎のためアトリエを提供して歓待します。よき理解者であり経済的支援者でした。北斎ら文化人が遊んだ庵「碧漪軒（へきいけん）」は当時の

面影を残し、今はサロンバーとなっています。

小布施の本通りで、長野信金小布施支店を左に見て、右に蕎麦屋、新聞店、手作りジャム店、民芸雑貨店、「栗菓子御三家」の一つ竹風堂が並び、全て白壁の和風建築に統一され味わい深い景観を作り出しています。古い大門をはさんで「御三家」の小布施堂本店と桝一市村酒蔵場が建っています。

小布施堂の奥の間は食事処になっていて、純和風料理も評判ですが、季節ごとの栗菓子のデザートは食べるのが惜しいほど美しい。



昨年、ある研究会の視察旅行で桝一の当主市村次夫氏のお話を伺う機会を得ました。その中で、現在の小布施というまちがブランド化し、人口一万二千人のまちが年間一二〇万人の観光客を惹きつけるわけは、行政が主導した景観作り政策にあるのではなく、まちの住民が、ここに住みここで商いする住民の一人一人が、「地方の衰退は止むを得ない流れだ。だから仕方がない」とは思わなかったことにあるということを強く感じました。

どこのまちであれ、衰退することは仕方がないと思っていたらそれは必然の道です。



市村氏は、ここで商いをする者は自分の店に「ここだけの特徴」を持つことを常に考えたといいます。

たとえば、桝一の場合は酒造場には利き酒専用カウンターがありますが、ここでしか飲めないお酒を、ここで飲む分しか造らないというのが桝一の「こだわり」だといいます。

ある店の主人は、原材料になる素材を広く世界に求め、現地の人が老いてなお驚くほどの視力を保っているという北米産のブルーベリーを、現地を歩いて探し当てたという道のりを嬉々として語ります。

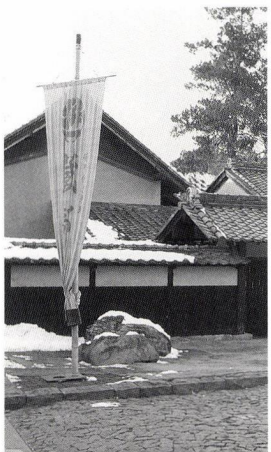
他方、一般市民は「オープンガーデン」といって、誰でも自由に個人宅の敷地内に立ち入り、花や木や石庭を鑑賞できるよう庭を開放しています。もてなしの心が市民に浸透していることを感じさせます。

栗の木美術館、日本のあかり博物館、中島千波館、中国古陶磁コレクション了庵など、多彩なミュージアムが点在し、年間入場者数は六〇万人から八〇万人を数えます。

小布施堂の敷地内には高井鴻山記念館があり、酒蔵を左の路地に入ると目の前に北斎館が見えてきます。世界で唯一、北斎の肉筆画が展示されている美術館です。鴻山が北斎に依頼した祭り屋台の天井絵（龍・鳳凰・怒涛男波・怒涛女波）も展示されており、見る者を圧倒します。

北斎館の前から、道に栗の木を埋め込んで舗装した「栗の小径」が続いています。まちの隅々に、ある種の神経が通っている気がします。

小布施というまちは、道路に面した建物の外観を統一しただけのまちではありません。決して「仕方ない」とは言わない人たちの手で支えられているという、市村氏の言が説得力を持って迫ってきます。



アルバムの一枚

直江津水族館

戦後の復興間もない昭和二四年（一九四九）、中田松三さんが地元の有志とともに私立の水族館を建てました。

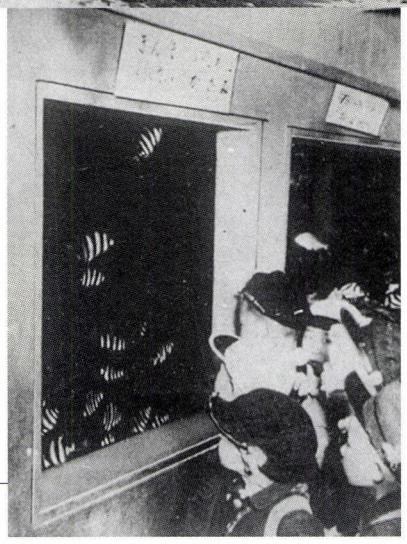
中島通り（直江津地区・中央三丁目＝天王町）の突き当たり、海を望む砂丘の上にありましたが、海岸侵食や海岸道路の建設で、かつての砂丘の面影はどこにもありません。

海の生き物の神秘に魅せられた水族館は、館内はひんやりとして薄暗く、今のようにデートスポットになるような水族館とは程遠いものでした。

直江津水族館は二六年財団法人に、二八年には博物館法による水族博物館（全国で七館）に認定されるとともに、二九年には町営となり、昭和三一年、社会教育館西側の松林の中に新たに水族館を建設しました。五五年に現在の水族博物館が出来るまでは、観光や校外学習の場に、多くの人たちが訪れました。



外観は当時としては大変モダンな建物で、貝細工などのみやげ物を売る売店もあった
入館を待ちきれない子どもたちの笑顔が見える



上　松林の中に建つ水族館　当時、冬期間は休館していた
下　手を入れれば魚に触れそうな大水槽は人気の的だった





発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

偶然のことではあるが、今年は親鸞聖人配流八百年、越後福島城築城四百年、電灯百年という節目の年が重なった。

それぞれ歴史は〈今の地域〉に大きな影響を与えている。ひとつひとつ洗いなおして、光の角度を変えて照らし出して見ることで、新たな地域への道標になりはしないだろうか。

お忙しいなか学生時代の福島城発掘の思い出を書いてくださった大橋氏は、伊万里研究の第一人者として活躍されている人である。原稿執筆の仲介の労をとってくださった妙高市の宮腰氏にお礼申し上げます。宮腰氏も御館発掘に参加されている。

第7巻2号　6月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」春号
第七巻一号　通巻二十五号
発行日／平成十九年三月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二―一―八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三―九―五
〒九四二―〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十九年三月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・木南康子

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)